本尊さまがどこかに行ってしまった

釣学院住職
第二回海外留学僧
河内義宣

「他流には名号よりは絵像、絵像よりは木像というなり。当流には木像よりは絵像、絵像よりは名号というなり。」

前掲の文は『蓮如上人御一代記聞書』に出てくるお言葉ですが、私達は心情的、感覚的に名号が書かれていても、それほどに思わないが、すばらしい御尊像がおまつりされていますと自然に手があわさり礼拝もするということになるのが一般的でありましょう。しかし、それではいけないという事なのでありましょう。逆に言えば、御尊像がなくても名号があったら合掌礼拝、お念仏が唱えられなくてはいけないし、たとえ名号の掛軸がなくてもお念仏が唱えられなくてはいけないと示されているのであります。

この事は私達が合掌し礼拝する対象を外にばかり見ていてはいけない、合掌し礼拝し、お念仏し、あるいは読経する、そこにこそ仏さまがいるではないか、そこを直視せよと言われているように思われますがどうでしょうか。

ところで、この話しを持ち出したのは、ニュ

ーヨーク・ゼンセンター（Z・C・N・Y）でおもしろい事があったからであります。

昭和六十一年九月一日、私は初めてZ・C・N・Yを訪ねました。それまで坐禅や読経などの行持はリヴァデールにある禅真寺において行われていたのですが、その直前からヨンカーズにあるベーカリー（パン工場）の三階が本堂兼坐禅堂として使われるようになっておりました。もちろん日本のお寺のように須弥壇があったり、坐禅堂があったりするわけでなく、壁をブチ抜いて部屋を広くしただけのものでした。ハドソン川を見渡せる窓際に粗末な壇が設けられ仏像が一体安置されており、そこで四時の坐禅、三時の勤行が行われるわけですが、ある日、会員が持ち込んできた自然木のT字形になったものが祭壇にとってかわりました。凸凹だらけの自然木ですから仏像をおくにも、その他三具足をおくにも、よほど注意しないと倒れてしまうといったものでしたが、そうこうしているうちに釈迦牟尼仏の御尊像がかたずけられてしまい、メンバー諸氏は何もおまつりしてない自然木の祭壇に向かって合掌、礼拝、読経することになったのでした。

この事に関して会員の中で疑論らしい疑論がほとんど聞かれなかったのには驚きました。一つにはパン工場の方が猛烈に忙しく、特に、十一月の感謝祭、十二月のクリスマスに向かっては、その労働（作務）こそがベーカリー禅堂の臘八摂心であるといったものでしたから、そんな事を話している余裕がなかった事がありましょう。また一つには前に紹介した『英訳甘露門』にグラスマン徹玄先生の考えもあり、偶像崇拝を否定する人達にも仏教が容認、受用できるようにということで、最初の奉請三宝の中にBeing One With All Formless Forms Throughout Space and Time!!という言葉が

挿入されたこともあり、更にはヒッピーの人達にかつてもてはやされた『金剛経、Diamond Sūtra』は禅を志すほどの人達はたいがい目を通しており、経典の中に、

「およそあらゆる相は皆これ虚妄なり、もし諸相は相に非ずと見るときは、すなわち如来を見る」

「菩薩はまさに一切の相を離れて阿褥多羅三藐三菩提の心を発すべきなり」

「如来はまさに、諸相を具足せるを以て見るべからず」

などの字句があり、最後には、

「もし色を以てわれを見
音声を以てわれを求むるときは
この人は邪道を行ずるもの、
如来を見ること能わざるなり」

という有名な四句偈のあることを知悉しており、問題にならなかったのかも知れない。中には『大般若経、The Large Sūtra on Perfect Wisdom』等にも目をとおしている青年がいたりで、アメリカの禅仏教というものが非常に知的な要素が強いなと感じたことでありました。

釈尊以来、印度、中国、日本等、それぞれの国民性にもとづいて仏教文化をつくりあげてきましたが、これからアメリカがどんな仏教文化をつくりあげてゆくか、たいへん興味があるところです。